

読書について

常木淳 日本大学経済学部教授
(財政学、公共経済学)

研究者という商売柄、本との付き合いは長い。もちろん、そのプロセスでは、図書館とも大変お世話になり、多くの関係者の方々から便宜を図っていただいていた。しかし、ここでは自分の直接の読書体験ではなく、全ての意味でおそろしく対照的な二人の「天才」による、一見したところまさに対照的な読書術を紹介することにしたい。

一人目の天才は、19世紀ドイツの偉大な哲学者、アルトゥール・ショウペンハウエルである。この稀代の厭世家の手にかかると、読書という無条件に立派に見える行為もまた、彼の苛烈な批判の刃から逃れることはできない。彼の読書論は、以下のように始まる。「もともとただ自分のいづく基本的思想にのみ真理と生命が宿る。…書物から読みとった他人の思想は、他人の食べ残し、他人の脱ぎ捨てた古着に過ぎない。」「精神が代用品になれて…自らの思索の道から遠ざかるのを防ぐためには、多読を慎むべきである。」「(ショウペンハウエル(斎藤忍随訳)「読書について」、岩波文庫)「若いうちにたくさんの本を読んで、しっかり勉強して、立派な大人になりなさい」などという校長先生の朝礼に出てきそうなお説教など形無しである。

さて、ショウペンハウエルとはあらゆる意味で対照的なもう一人の天才が、20世紀日本の高度成長期に小学校卒の学歴で総理大臣にまで上り詰めた政治家、田中角栄である。残念なことに、最近、大阪から引っ越してした筆者は、角栄の秘書として彼に仕え支えてきた早坂茂三氏の手になる角栄の評伝を引っ越し荷物の中に埋もれさせてしまい、どうしても見つけることができないのであるが、その中には角栄の卓抜な読書術が記されていたと記憶する。彼は、何か調べたいとか勉強したいとかいうことがあると、早坂氏に命じて「これこれに関する本を何貫目ほど買ってこい」と言ったそうである。つまり、本の題名も作者の名前もない、本の価値を魚や金属の如く重さで測るのである。おそらく重要な問題になるほど、貫目は重くなっていったことであろう。

一見すると、ショウペンハウエルと角栄は正反対のことを言っている。片や人間社会の愚劣にとことん愛想をつかして、孤高の思索に人生の慰めを見出した哲学者、対するは、人間社会の汚辱の只中に己の運命を引き受けて権力の頂点を極めた政治家となれば、対立

するのは当たり前である。だが、筆者には、この二人の読書術の対照性よりも共通性の方が、より強く感じられてならない。

両者の読書術の共通性は、ともに、書物それ自体に対して、著者の名称、地位なども含めて一切の権威を認めていないことである。漫然たる読書、あるいは他人に知識をひけらかすための読書などくそくそえと言っているのだ。早坂氏の著書によれば、角栄は「政治の本質は常識である」と語り、彼が最も嫌ったのは空理空論であったという。これと対応するショウペンハウエルの言葉を拾うならば、「学者とは書物を読破した人、思想家、天才とは人類の蒙をひらき、その前進を促す者で、世界という書物を直接読破した人のことである。」(同前)ということになるだろうか。

読書は、あくまでも自分が知らないことを勉強して、自分のためになる知識を身につけるために存在する。そのために読む本を徹底的に厳選するか、逆に貫目を買って乱読するかは人次第、課題次第である。だが、どう転んでも、読書は、それによって本当に自分のものになったと思えるような何かを身につけて初めて意味がある。そこをわからないと、安易なハウツー本に踊らされたり、いい加減な宗教やカウンセリングの本を盲信する破目にもなる。その意味で、この二人の天才の読書術は、我々現代人にとって大切な教訓を含んでいるように思われるのである。